私の北極星

三浦喜代子

月や星を見るのは楽しい。満月が近づいてくると夕方が待ち遠しくて、自室の東に向いた窓にしがみついて飽かず眺めている。

星を見るときは強く情感をそそられる。もっとも東京の空はもうほとんど星を抱かなくなった。それがひどく寂しい。

一月に入って、一日中北西の季節風が吹き荒れた日があった。その夜の空は久々に無数の星々で賑わっていた。痛いほどの冷気をがまんして、戸外にたたずみ見とれてしまった。心のプラネタリウムに重ね合わせた。かつてそこにはひときわ大きなアルファー星が輝いていた。夢という名であつた。チラチラとフリースタイルで瞬く小星たちは希望という名を持っていた。十代のプラネタリウムは満天、夢と希望だった。勉学に読書に没頭していたせいか、夢も希望も壮大だった。文学博士になりたい、ノーベル文学賞にノミネートされたいなどと……。

結婚して家業に打ち込み、多少の経済力を手にすると、夢も希望も素早く変身した。ビ

ルのオーナーになれるかも知れない、もちろん社長夫人にと。
夢の前味に酔っていた、まさにその時、テロの標的にされたように、数個の実弾が夢の柱に命中した。何の目的でだれが仕掛けたか、わからなかった。
命がけで逃げのびたが、マイビジネスはおろか、マイホームも砕け散り、二人の娘だけがマイファミリーの破片に座っていた。
私はもう心のプラネタリウムを覗く気力も余裕も失ってしまった。長い間、深い心の闇路をさまよった。
しかし闇の中にも神はおられた。北極星のように、イエス・キリストが不動の位置から不変の光を放っていた。光の声を聞いた。
『私は永遠の愛であなたを愛している』と。
今では心のプラネタリウムはすっかりリニューアルされ、キリストによる夢と希望の新星がいくつも誕生して、活況である。